上野博物館の細部意匠

——コンドル設計上野博物館に関する考察・Ⅲ——

正会員 小野木重勝*

はしがき

本稿では、上野博物館の当初設計図のうち、細部詳細図が現存するものを取りあげ、これによって内外各部の細部意匠を紹介検討する。細部詳細図が現存しない個所については明確を欠くので、ここでは省略することにした。

なお、外部意匠については前稿で概述したが、内部意匠については、現存設計図中、内部意匠に関する図面がきわめて少なく、No. 5 図（玄関広間・階段広間詳細図）、No. 6 図（桁行・梁行断面図）、No. 37 図（翼屋階段詳細図）、No. 45 図（幅木詳細図）、No. 46 図（玄関広間天井見上・断面図）、No. 54 図（中央階段断面詳細図）、No. 55 図（同階段手摺鉄物詳細図）、No. 61 図（扉内面鏡板線形詳細図）程度しか現存しない。このように、内部意匠図が少ない理由は、博物館という公共建築としての性格によるものと考えられ、前稿の平面構成でも述べたように、大半のスペースが展示室にあてがわれ、これらの展示室は格別意匠を凝らす必要がなく、しかも全室副一的に取扱われるので、当然図面数は少なくすむことになる。本建物で内部意匠に重点をおく個所としては、中央玄関広間・階段広間・両翼屋階段室以外にはなく、これらに関連した詳細図を主体に作成されたと考えてよい。したがって、内部意匠については特筆するものも少ないので、本稿で内部細部意匠にあわせてとりあげることとした。

1. 外部細部意匠

(1) 屋根廻り

1) ドーム頂飾 No. 53 図(図-1)は、ドーム頂飾の詳細図であるが、「Finial to be constructed of Cast iron to be afterwards gilt」とコンドルの注記が記されており、鑄鉄製の部品で構成され、金箔または金めっき仕上げされたもので、脚部に導線が描かれているところから避雷針として設計されたものであることがわかる。真棒は、ドーム屋頂心柱に突き差し、脚部を帯鉄加工の固定金具で緊結し、上方から風見矢、唐草をあしらった方位文字板、唐草模様を陽刻したグローブが取り付けられている。風見矢には、「zinc arrow」と注記されている。

図-1 ドーム頂飾 (No. 53 図)

図-2 屋根棟飾り (No. 51 図)

る。この図にはコンドルのサインがあり、コンドル自身が作成したもので、製図技法は、フリーハンドも混じえて勢いのよい筆致で描かれ、彩色も美しく、現存図面中でも、もっともコンドルらしい特徴があらわれた出色の作と考えられるものである。

2) 屋根棟飾り No. 51 図(図-2)は、テラコッタ製の屋根棟飾りを描いたもので、トレシングペーパーにペンで描かれている。「Two kinds of finials will not be required. All the finials are to be of the same size and pattern like this drawing viz six in number. Part shewn black to be very deeply sunk. All ornament and markings to be very sharp and deep to give good effect from distance.」とコンドルの注記が記されており、本屋および両翼屋棟両端の飾りとして6個が同一寸法の型で作られたものであることがわかる。波紋と魚2匹に宝珠をあしらっており、「鯉の滝のぼり」の日本的題材を意匠化したものと考えられ、コン

* 米子工業高等専門学校助教授

(昭和46年1月22日本稿受理・討論期限昭和46年9月末日)

図-3 軒廻り (No. 15 図)

図-5 正面2階中央ベランダ廻り (No. 9 図, 部分)

図-4 軒蛇腹詳細 (No. 32 図)

図-6 ベランダ手摺親柱 (No. 34 図)

ドルは、遠方からもよく見えるように、彫りを深く鋭くするように注記している。

(2) 軒廻り

No. 15 図(図-3)は、コンドルが作成した軒廻り詳細図であるが、本図は翼屋部分を示し、パラペットは省略されている。八角化粧柱は、蛇腹受石より上では先細となり、コーニス上では八角形の親柱となり柱頭飾を付している。図面には「Dowel」と記入があり、柱頭飾だけ太柄で継ぎ足されている。コーニス上には軒樋が廻り、蛇腹上石・持送り・蛇腹受石については、No. 32 図(図-4)に線形の詳しい原寸が描かれている。これらの線形曲線は、胴蛇腹・窓台石・玄関柱頭飾などの線形曲線と共通の曲線を用いているのを知ることができる。軒蛇腹の納まりについて、コンドルはこれと同じ形式を「造家必携」(明治 19 年)の畳石篇に掲げ、「屋壁ノ上部ハ必ス線形ヲ附シテ装ヒタル横ノ突出ヲ以テ之ヲ限ル之ヲ軒蛇腹ト称ヘ種々ノ造法アリ例ヘハ第八十七図ノ如キハ之ヲ三段に分チ中段若干尺毎ニ持送ヲ出シ下段ノ薄層ヲ踏シデ盤層ト名クル上段ノ突出層ヲ受ケシメ(後略)」と記しており、持送りをもち軒蛇腹形式のもっとも一般的な納まりとしてコンドルは考えていたとみることができる。

(3) 正面2階中央ベランダ廻り

No. 9 図(図-5)は、「コンドル博士遺作集」(昭和 6 年)に掲載された周知の図面であるが、本建物中最重点をおいて意匠を凝らした部分であるので、本図は現存

設計図中でもっとも精緻をきわめている。

ベランダの円柱は、柱脚および柱頭部に特異な飾りを持ち、手摺柱との関連から蓮瓣を意匠化したものと考えられ、コンドルのいうインド風とみるべきものである。これらの円柱は、前後2列に並んだ複列柱であることが同図の矩計断面図によってわかる。柱間を広狭交互に変えてこれにアーチを架す手法は、コンドルがよく用いた手法であるが、この場合は多瓣アーチを架し、せり高およびフォイル数を変えている。スパンドレルには円紋を付し、額縁およびスパンドレルの類似の取扱い方は開拓使物産売捌所2階窓廻りにもみられるところで、額縁上煉瓦壁には隠しアーチが各柱間にかけられ構造的配慮がはらわれている。手摺は、広い柱間の中間に親柱を入れているが、親柱詳細は No. 34 図(図-6)に描かれている。親柱柱頭は逆蓮頭で脚部には蓮座を付しているが、「是模様見合ノ事」と記入されており、実施にあたって蓮座は中止されたい。手摺笠木・羽目については No. 36 図に詳細が描かれており、羽目は円環を菱つなぎにした透模様とし、笠木見付には鍔頭金物を打っている。なお、No. 3 図(正面図)には親柱が描かれておらず、手摺羽目の形式も異なっているが、詳細図の方が竣工写真の姿には合致している。

(4) 正面1階中央玄関廻り

前記 No. 9 図(図-7)によってわかるように、正面中央入口3間のうち中央柱間は両脇柱間よりも少し広くなっている。No. 5 図の記入寸法によると、中央間は柱

図—7 正面中央玄関廻り (No. 9 図, 部分)

図—8 中央玄関アーチ迫石詳細 (No. 42 図)

内法で9尺6寸5分、両脇間は8尺3寸で中央間が1尺3寸5分広くなっている。したがってこれに架せられたアーチせり高も中央間が高くなっている。アーチ曲線は、四芯尖頭であり、内輪は迫石・外輪は白色煉瓦を混えたイスラムモチーフの迫持煉瓦で構成され、迫持煉瓦外周にはさらに縁石が廻らされている。アーチ迫石および迫持煉瓦の詳細は No. 42 図 (図—8) に原寸が描かれており、迫石・迫持煉瓦にはアーキヴォールトが付けられ、迫石見付面は唐草浮彫で飾られている。

角柱のベースおよび柱頭の線形曲線の詳細は No. 33 図に現寸が描かれているが、No. 9 図によって柱頭には鳩と竜の浮彫が飾られているのを見ることができる。「コンドル博士遺作集」にも、「随所に日本趣味を加へたる博士苦心の手法を窺ふに足るものなり。正面中央昇降口の列拱を支ふる柱頭及拱面に蛟竜・家鳩・波紋¹⁾等の象形を巧みに按配したる如きは則ち是なり。」と記されているが、前記の屋根棟飾りや前稿で述べたドラム横の立像とあわせて、中央入口の最も目立つ個所に、日本的題材を取り入れたこれらの彫刻を配したのも、中央部ファサードの意匠に重点をおいてコンドルがその意匠に腐

図 9 中央玄関鉄格子戸 (No. 52 図)
中央の図は縦格子頭部の原寸図

図—10 正面中央階段 (No. 16 図)

心した結果とみることができよう。

これら各柱間には鉄格子戸が嵌込まれており、No. 52 図 (図—9)、No. 59 図はその詳細図である。中央間・両脇間の鉄扉見付詳細が描かれているが、両脇間の鉄扉については、柱間が異なるだけであるので細部が省略されている。両開鉄格子戸で戸車を付し、上框は釣元上がりの曲線をし、上端には瑤瑤模様を付け、扉下段には亀甲繋ぎ・唐草・四葉模様を、中段には花狭間菱格子を入れ、縦格子は八角形断面で上方には柱頭線形を付し、2階ベランダアーチに用いられたのと同様のスパンドレル模様を付け、召合せ上端の中心飾りに菊の御紋章を、釣框上端には宝珠を付けている。藤本寿吉の製図になるものであるが、全体として、精緻で均齊のとれた意匠の鉄格子戸である。

中央外部階段は、No. 16 図 (図—10) によると8段の石階段で、両側に親柱付手摺をもち、手摺は笠木および幅木を付け、羽目には木瓜模様と円紋の彫刻を配している。親柱は No. 35 図の現寸図にも詳しく、角柱の擬宝珠柱で、擬宝珠下には蓮座をもち、ベースの線形曲線は、2階ベランダの手摺親柱のそれと同一曲線になっている。

(5) 窓および出入口廻り

1) 1階尖頭アーチ窓 No. 10 図 (図—11) は、正・側・背面の1階尖頭アーチ窓廻りの詳細図であるが、背面中央部の小窓を除いて、1階はすべてこの窓で統一さ

図-11 正側背面1階尖頭アーチ窓 (No. 10 図)

れている。アーチは四芯尖頭アーチで、イスラムモチーフの迫持煉瓦と外輪の普通迫持煉瓦の添積みで構成されている。窓は中方立で3区に分ち、下窓は両脇片開ガラス戸・中央嵌殺しとし、中欄間は嵌殺し、上欄間はトレフォイル飾り組子の内倒し窓としている。

2) 正側面2階尖頭アーチ窓 No. 18 図は、正・側面2階窓のうちの尖頭アーチ窓詳細図である。この図によるとアーチ内輪曲線は、ゆるやかな葱花アーチ曲線となっており、添積煉瓦の外輪曲線は四芯尖頭アーチ曲線になっている。アーチ迫石および窓両脇額縁を一体の石造額縁として廻らしているので、全体として花頭窓を思わせるが、1階のイスラムモチーフの窓や2階の額縁付多瓣アーチ窓にくらべると目立たぬ地味な取扱いになっている。窓台下は2階窓共通の手法として石造腰羽目とし、窓は前記窓同様中方立で3区に分ち、下窓はトレフォイル飾り組子の片開ガラス戸、上欄間はトレフォイル飾り組子欄間としている。

3) 背面中央部1階小窓 背面中央部の1階には、出入口をはさんで両脇に尖頭アーチ窓1個と小窓2個ずつを配している。No. 19 図は小窓の詳細図であるが、ここではアーチ内輪を馬蹄形アーチ曲線、外輪を尖頭アーチ曲線とし、イスラムモチーフの見付幅の広い迫持煉瓦積みとしているところが特徴である。窓は両開ガラス戸、欄間は中心円飾りに放射繋ぎの一般的意匠である。

4) 背面中央部2階尖頭アーチ窓 背面中央部2階両脇の窓で、鳥居菊助が描いた No. 11 図 (図-12) によると、アーチは四芯尖頭アーチで、前記1階小窓同様イ

スラムモチーフの迫持煉瓦は見付幅が広く、この外にさらに縁石を廻らしている。窓台下は石造腰羽目とし、窓は中方立で3区に分ち、トレフォイル組子の片開戸とし、欄間は花瓣模様の中心飾りに放射繋ぎ組子を入れ、1階小窓と関連のある意匠にしている。

5) 背面翼廊2階尖頭アーチ窓 No. 12 図によると、窓外廊は前記中央部2階尖頭アーチと同一形式であり、

図-12 背面中央部2階尖頭アーチ窓 (No. 11 図)

図-13 背面2階内輪多瓣外輪尖頭アーチ窓 (No. 28 図)

建具だけが異なり、装飾性の少ない形式の建具になっている。

6) 背面2階内輪多瓣外輪尖頭アーチ窓 No. 28 図(図-13)は宮原石松の作成した背面2階中央部・翼廊・翼屋に配置された内輪多瓣外輪尖頭アーチ窓の詳細図であるが、建具は省略されている。外輪は四芯尖頭、内輪はフィイル7個の多瓣アーチという特異な形式のアーチで、迫石は3段のコンパウンドアーチに構成されている。形態は特異であるが、イスラムモチーフの迫持煉瓦を用いた窓にくらべると、前述の正側面2階尖頭アーチとともに、色彩的には目立たぬ窓ということができ、コンドルは窓の配置にあたって形態の変化にあわせて色彩・明暗対比も考慮していたとみることができる。窓台下は石造腰羽目であるが、この腰羽目の繰形詳細が No. 29 図に描かれている。

7) 側面出入口廻り 側面出入口の詳細図には藤本寿吉が作成した No. 20 図(図-14)があり、入口には四芯尖頭アーチを架し、扉は内開両開戸で、外面は堅板張りに3段の飾金具を打ち、中段の飾金具の中心飾には輪宝が付いている。内面は唐戸形式になり、各鏡板には四葉模様やトレフォイル模様などの繰形が彫られており、その一部詳細が No. 61 図に描かれている。欄間はトレフォイル飾り組子で、1階尖頭アーチ窓の欄間と同形式

図-14 側面出入口廻り (No. 20 図)

図-15 背面出入口廻り (No. 13 図)

になっている。

外石階段は、6段の上に、踊場扉杢摺際にさらに2段設け、両側手摺は正面中央階段同様親柱付手摺であるが、親柱の擬宝珠や手摺羽目の繰形彫刻などの細部意匠は正面階段と違えている。

8) 背面出入口廻り No. 13 図(図-15)によると、背面中央出入口にはイスラムモチーフの四芯尖頭アーチを架し、アーチ外輪にはさらに普通迫持煉瓦の添積をしている。扉は内開両開戸で、外面鏡板には繰形などを付けず、内面は上方2段の鏡板に繰形を付けている。欄間は4連のトレフォイル組子が嵌められており、階段は4段の石階段で手摺はなく、扉の装飾とともに、側面出入口廻りよりは簡略化されている。

2. 内部細部意匠

(1) 玄関広間

中央玄関広間については、No. 5, No. 6, No. 14, No. 46, No. 47, No. 48, No. 50 の各図によっておよその状況を知ることができる。広間周囲1間通りの列柱(人側柱)間および階段広間境の列柱間には四芯尖頭アーチを架し、人側柱と側柱の間には尖頭アーチ曲線の持送りを付している(図-16, 図-21)。床は花崗岩の四半石敷で、柱および内壁は全面煉瓦化粧積とし、四芯尖頭アーチは白色迫持煉瓦を混えたイスラムモチーフで、柱頭繰形下にも白色煉瓦を3段混えている。展示室入口には石製楣を架し、楣下両端には持送り石を飾り、上方煉瓦壁には隠しアーチの煉瓦積が施されている。扉は両開きで、広間側は堅板張りに3段の飾金具を付け、中心飾りに輪環が取り付けられ、展示室側は唐戸形式で、各鏡板には全面繰形が彫られている(図-17)。

広間天井は蛇腹付の塗天井で、No. 50 図に断面詳細が描かれているが、宮原石松が描いたこの図は、蛇腹断面曲線および天井下地詳細を記したもので、中心飾りの模様などについては不明である。入側部分は各柱間ごとに同一形式の一種の穹窿天井とし、No. 47 図や中村達太郎が作成した No. 48 図(図-18)の詳細図によると、その断面は複雑な繰形で構成され、中心飾り模様や蛇腹・持送りの唐草模様の浮彫りは見事であり、精巧で変

図-16 梁行断面 (No. 6 図, 部分)

図-17 玄関広間展示室境出入口 (No. 14 図, 部分)

図-18 玄関広間入側天井 (No. 48 図)

化に富んだ天井である。

(2) 階段広間

中央階段広間には、左右両側に階段を設け、階段踊り場下は、左右翼廊展示室への通路となっている。階段昇り口の柱間3間にはアーチを架しているが、このアーチや柱・壁面は前記玄関広間と同一手法になることが No. 6 図の断面図によって判明する。背面側には通用口および

図-19 中央階段 (No. 54 図)

図-20 中央階段手摺鉄物詳細 (No. 55 図)

両脇に尖頭アーチ窓と小窓をとっていることは、平面図や背面図にみるとおりであり、通用口扉内面意匠については前述した。

階段は、No. 5 図によると 36 段の中あき折階段で、下方階段および踊り場の内側柱間には四芯尖頭アーチを架し、柱間に手摺鉄物を嵌込み、上方階段および2階には親柱付手摺鉄物²⁾を廻らしている (図-19)。手摺鉄物は No. 55 図 (図-20) に詳細が描かれており、青海波および唐草模様を意匠化し、菊の御紋章をあしらっている。

広間天井は、No. 49 図³⁾によって、玄関広間と同様の蛇腹付塗天井であることがわかるが、蛇腹帯が玄関広間より多数あり、また蛇腹を蓮瓣の浮彫で飾るなど意匠を凝らしている。中心飾りの模様などは明らかでない。

図-21 主行断面図 (No. 6 図, 部分)

図-22 展示室出入口 (No. 14 図, 部分)

2階階段広間については詳細図が現存しないが、No. 6 図の梁行断面図によると、後述する展示室と同一の取扱いになっていたことが判明する。

(3) 展示室

1・2 階の各展示室が剛一的に取扱われたことは前述したが、No. 6 図の桁行断面図(図-21)によってもその状況を確認することができる。仕様書によると、1階展示室床は小砂利コンクリート仕上げ、幅木は嶺山石製、2階床は桧拭板張り、幅木は桧製で高さ1尺あり、その線形詳細が No. 45 図に描かれている。壁は1・2 階共全面漆喰塗、天井も漆喰塗天井であったことが仕様書に記されているが、詳細図面は現存しない。各出入口は、No. 6 図断面図によると、欄間付両開唐戸で、欄間は側面出入口の欄間と同一形式であり、唐戸は No. 14 図に描かれている図がその詳細図と考えられ、玄関広間境出入口と側面出入口の各扉内面の線形彫刻と互に関連をもたせた線形彫刻を鏡板に付けている(図-22)。展示

室の室内仕上げは総じて平凡な取扱いに終わっているといえる。

(4) 翼屋階段

中央階段が石造であるのに対して、両翼屋階段は木造で宮原石松がその詳細図として、No. 30, No. 31, No. 37, No. 38 図の4枚の図面を作成している。35 段の中あき折階段で、1階昇り口は階段室奥にとっている。手摺は、1・2 階昇降口に擬宝珠付親柱を、中間に逆蓮頭親柱を配置し、笠木下に木瓜模様透彫りの羽目板をはめ、その下に連子格子を組入れている。擬宝珠付親柱は、側桁下方にまでのび、その先端に柱頭と同じ擬宝珠飾りを下向きに付けているのが特異である。

むすび

上野博物館の内外各部の細部意匠を、細部詳細図が現存するものについて論述した。建物全般にわたってその細部を知悉することはできないが、意匠計画のおおよその傾向を具体的に知ることができたと考える。

現存設計図によって、上野博物館の内外意匠を通観すると、内部意匠にはみるべきものが少なく、コンドルの主力はおもに外部意匠に傾けられたとみることができ、それは、はしがきでもふれたように、公共建築という建物の性格にも起因するものと考えられ、また、合目的的に設計処理をするコンドルの姿勢をうかがうこともできる。

『建物に東洋的性質を与ふる如き形態をば、印度或は「サラセニック」建築の中に求むるの必要を生ずるに至れり』²⁾として、コンドルはインドおよびイスラム風を導入したのであるが、イスラム風の細部意匠としては、外部では、ドームの形式、ドラムの多瓣アーチの手法、出入口・窓・ベランダ廻りのアーチを主体とする手法に、内部では、玄関広間および階段広間のアーチの手法にとり入れられたもの以外に目立つものは見当たらない。しかし、数多い窓や出入口、あるいはこれらの形態・色彩に変化をもたせ、また連窓に組合わせるなどの手法によって、建物全体としては、イスラム風がかなり濃厚に目立つものにまとめあげている。インド風の細部意匠としては、上記イスラム風の中に、インドイスラム風の導入とみられるものもあり、このほか、2階ベランダの柱飾りや手摺親柱の逆蓮頭、内外階段の手摺親柱の擬宝珠や逆蓮頭などの仏教色の濃い細部意匠をインド風として取扱ったものとみられる。しかし、これらの中には、むしろわが国の仏教建築の細部意匠に倣ったとみられるものも含まれている。さらにコンドルは、部分的に日本的装飾をもとり入れ、みずからもその一部図面を作成しているが、工部大学校生徒の作成した図面には日本的な装飾文様はかなり広範にわたって用いられている。したがって、コンドルは、単にインドあるいはイスラム風の導入だけにとどまらず、日本的装飾をも折衷して東洋的

徴を出すことに努めたということができ、コンドルのいう東洋的とは、イスラム・インド・日本なども含めての文字通り東洋全体を指すものであったと解釈することができる。コンドルがインド・イスラム風を主体に、しかも日本的装飾を加味したいという気持を抱きながら、来日間もないかれにとっては、日本的装飾にまだ十分精通することはできなかったはずである。工部大学校生徒に日本的装飾を加味した部分意匠図を作成させることによって、コンドルのこの欠を補うことができたはずであり、工部大学校生徒の設計参加が、単に設計実習や作業量の消化ということ以外に、このような意味を含んだ協力であったと考えることも可能であろう。

終わりに、コンドルの同時期の作品である開拓使物産売捌所の意匠との関連についてふれておきたい。ベニシアン・ゴシック風とされる物産売捌所の外部意匠には、上野博物館と同じように、イスラムモチーフの出入口・窓をとり入れ、内部装飾には東洋趣味⁶⁾が加えられ、一部繰形・文様には上野博物館と同種のものが用いられている。これら意匠の類似性や接近した設計時期などからみて、上野博物館と共通した意図のもとに設計にあたったことが考えられ、物産売捌所の設計委嘱が上野博物館よりもおくれたという観点にたって考えるとき、上野博物館で、インド・イスラム風を導入し、東洋的性質を与

えようとした構想の一部が、そのまま物産売捌所にも持込まれた可能性が強い。すなわち、物産売捌所の構想素材が、すでに上野博物館の構想の中に醸成されていたとみることができる。他面、小規模とはいえ政府要人の饗応にも用いられる⁷⁾物産売捌所の室内装飾に、上野博物館ではみられない魅力をコンドルは覚えたに違いない。外部意匠に重点をおいた上野博物館、内部意匠に重点をおいた物産売捌所、この初期の二作品は、コンドルの設計意図の上で互いに関連しあった共通の性格を有する建物として意義が深いと考えるのである。

〔注〕

- 1) 迫石の唐草模様を波紋とまちがえている。
- 2) No. 5 図では石造手摺になっているが、No. 54 図、No. 55 図の鉄物に変更された。
- 3) 表題には「広間天井蛇腹」とだけ記されているが、玄関広間天井図であることが明白な No. 50 図と異なるところから階段広間天井の図面と断定した。本図も玄関広間の図とすると、玄関広間天井詳細図は No. 50 図と2案作成されたことになる。
- 4) 当初は、隣の小室とともに、管理用として配置されたものかも知れない。
- 5) 「ジョサイア・コンドル博士表彰」, 建築雑誌 402 号, 大正 9 年 6 月。
- 6) 「コンドル博士遺作集」, 昭和 6 年 12 月。
- 7) 明治 14 年 2 月 16 日, 有栖川宮および同息女が黒田清隆主催の晩饗会に赴いているなどはその一例である。(有栖川宮家従日記)。

U.D.C. 72.03 : 727.7

A STUDY ON THE UENO MUSEUM DESIGNED BY J. CONDER (III)

by SHIGEKATSU ONOGI, Assist Prof. of Yonago Technical College,
Member of A.I.J.

This paper describes on the interior and exterior ornamental details in the Ueno Museum on the basis of the plans.

J. Conder selected the pseudo-Saracenic style and moreover chase the Japanesque taste for it's designs and imparted an Eastern character to it.

He designed putting stress on the exterior ornaments because interior was occupied by many exhibition rooms and these rooms were not required ornaments so much.